

(最終講義)

ダライラマ六世の恋愛の詩

小野田 俊蔵

〈弾き語り〉

མཉམ་མཉམ་གྱི་མཉམ་མཉམ་

まるで十五夜の満月の

མཉམ་མཉམ་གྱི་མཉམ་མཉམ་

その姿の如く今日は素晴らしい日だ

མཉམ་མཉམ་གྱི་མཉམ་མཉམ་

けど月の中に住むうさぎも

མཉམ་མཉམ་གྱི་མཉམ་མཉམ་

いつかは命を尽くしてしまうのだろう

(39番)

མཉམ་མཉམ་གྱི་མཉམ་མཉམ་

野鴨は沼に恋焦がれて

མཉམ་མཉམ་གྱི་མཉམ་མཉམ་

しばらく留まりたいと想ったが

མཉམ་མཉམ་གྱི་མཉམ་མཉམ་

沼には白水がはりつめたので

མཉམ་མཉམ་གྱི་མཉམ་མཉམ་

がっかりと気を落として飛び去った

(9番)

ダライラマ六世の恋愛の詩

失礼をいたします。

ダライラマ六世のツァンヤンギャムツォ（一六八三—一七〇六）は、現在のインド領アルナチャルプラデーシュ州タワンで、中央ブータンの著名な僧侶ペマリンパ（一四五〇—一五二二）の子孫にあたるニンマ派信者の家に生まれました。

生まれて最初に発した言葉が「吾は三界の衆生の帰依処、ギエルワ・ロサンギャムツォなり。吾はラサのポタラ宮殿から来しものにして、まもなくそこに戻るべし」であったといえます。そんなあほな、という話ですが……。ダライラマ五世が死んだことは、当時公表されていませんでした。けど噂としては届いていたようで、近辺の人はですね「偉大な五世」の化身に違いないと噂しました。その噂を聞きつけた五世の摂政サンギェギャムツォという政治家がいますが、その人が密使を送って、化身に間違いないということを確認の後、摂政はですね、五世の死を隠さないといけない事情があったので、シャル僧院のソナムチョクドゥプという人の化身であるという、つまり別の人の化身であるという触れ込みで、両親を説得して、六世と両親と召使だけを、タワンからもうちよつとチベット寄りのツォナという村に移動させ、十二年間隠しました。摂政は個人教授をラサから派遣して教育を始めましたけども、本人は自分が五世の化身であることも知らされないまま居たので、不可解であっただろうし、不安な状況であったと推察されます。

子供が五世の化身であることを家族が知らされたのは一六九六年、公表されたのは一六九七年、六世本人が数え歳で十五歳。十五歳というのは意味があつてですね、数え歳の十五歳になったら沙弥戒を受けないといけない時期にあたります。それで、そこからラサに移動させられるわけですね。父親はツォナからラサへの道中で、理由はわかりませんが亡くなってしまいます。その悲しみが癒えない中で、パンチェンラマ二世のロプサンイェシエから

沙弥戒を受けて出家僧となります。

六世が生まれたのは南の方、ブータンの近所ですから、そっちの方の開放的な気質を受け継いでいます。当然、ダライラマとしての生活は、おそらく窮屈な思いをしたと思います。また長身の青年であったということが分かっています。弓が得意でアウトドアのスポーツが得意だった。なんでこんなことが分かるかというと、その当時、キリスト教の宣教使が、北京からバチカンに戻る途中にチベットを通過していて、その人がそういう記述をしています。ダライラマ六世は長身であってアウトドアが得意であったと記述しています。

今、会場のスクリーンに映っているのが、一応ダライラマ六世の絵なんですけど、昔の肖像画はどれ見ても一緒なんで、人相が分かるわけではないんですが……。一七〇二年に二十歳になった六世は、普通なら具足戒という、フルの戒律を、つまり二五〇戒ぐらいある有部系の戒律を受けないといかんですけど、ところが彼は受戒を拒否します。おまけにそれまでの沙弥戒も返しますと言い出すんですね。師僧だったパンチェンラマや摂政のサンギェギヤムツォも説得するんですけど、彼は全然聞かずに、僧衣を棄てて還俗します。髪を伸ばし長い三つ編みにして青いチベット服を纏って下町に出没したと言われています。これも宣教使さんの言葉で残っています。夜遊びの手引きをしていたタルゲネという名の悪友がいて、摂政はそいつがそのかしているだろうと思ってですね、暗殺計画を立てて六世一行を襲わせるんですが、ちょうどそのときに、酔狂で衣服をみんな交換して遊んでいたんですね。そこで誰がタルゲネか分からずに、失敗したんです。騒ぎの後で、それが摂政の指図だったと知った六世は、その後、ことごとく摂政と対立するようになりました。

今、スクリーンに映しているこれはですね、ポタラ宮殿なんですけど、写っているのは、私の四十歳ぐらいの頃の写真で、ダライラマ六世と同じぐらい腰まで髪を伸ばして、三つ編みをして、青い服を着て、記念撮影をしたん

です。若い頃は何を馬鹿なことをしていたんだという話ですが。大学にこれでしばらく通ってたので、みんなから異様な先生だ、と思われていたことだと思えます。本人はあまり気にしていなかったんですけど…。

当時チベット地域を軍事支配していたのはラザンハンという軍人で、彼は先代のダライラマ五世の熱烈な支持者だったんですね。だから余計によほど落胆したんだと思います。六世が放蕩ともとれる生活をすることに立腹していました。彼の詩の数々を見ればわかりますが、相当多くの女性との付き合いがあったようです。で落胆をしていますね、ラザンハン王は清の康熙帝の了承を得てダライラマ六世は本当の化身ではない、ということを出して、六世を捕らえます。北京に送致することになってですね、その道中に、デプン僧院という僧院があるんですが、ラサの中心街からちよつと離れたところですけど。そこに連れて行ったときに、デプン僧院に立て籠もり状態になるんですね。というのは、民衆がそこに押しかけていたらしいんです。ダライラマ六世を返せという民衆と、ラザンハン配下の軍人とで小競り合いが行われてですね。流血の事態が避けられないような状況だったんですが、最後は六世自身が投降する形で「自分はチベットに戻るから、人々よ悲しまないように」と言い残して、青海のほうに護送されて行きます。青海湖の南のクンガーノールという湖のほとりに着いた一七〇六年の暮れに彼は没します。病死であったのか処刑死であったのか不明です。康熙帝は遺骸を放棄せよ、その辺に捨てよと命じたと伝えられています。

ラザンハンという軍人はですね、どういう言い訳をしたのかというと、六世の選定自体が誤っていたのだということにして別の人物をダライラマと認定して一七〇七年に即位させます。しかしチベットの民衆の多くはそれに納得をしません。で六世が残した辞世の句、これを今日最後に歌おう思ってるんですけど、その辞世の句に出てくる

地名がリタンという、今は四川省に含まれているんですけど、リタンというところの地名が歌いこまれていたので、リタンに誕生した子供、ケルサンギヤムツォという名を後に名乗りますが、その子が七世であるとチベットの大家は噂をするんですね。

転生とか活仏という言葉がありますが、今それを聞くと誰でもダライラマをすぐに連想すると思います、切っても切れない関係ですけど。転生制度というのはダライラマより前からあります。転生として最初に有名になったのはカギユという宗派のカルマパクシという人です。カルマパクシ、このパクシというのは、中国語の博士をモンゴル訛りで読んだのがバクシなんですね。このバクシはですね、『東方見聞録』というマルコポーロの書物がありますが、これにバクシと出てきます。このカルマパクシのことを記述した逸話が出てきます。大元皇帝のクビライに寵愛されていたことで有名です。大元帝国はですね非常に栄えた帝国だったんですけど、権力継承が上手くいかず、跡継ぎを選定するときに、それぞれに家臣がいて喧嘩をするんで、うまいこと継承が行かなかった。それで勢いを失って、中国大陸では明にその地位を奪われてしまいます。大元は北方に引いて再興の期を伺うことになります。

北方ユーラシアをその後も支配していた大元なんですけど、明はどう呼んだかというのと、北元と呼んだんですね。元そのものじゃないと言いたかったんでしょう。北元というふうに称していました。十六世紀初頭、そのモンゴル世界の皇帝に推戴されたバトゥメンゲという人がいます。この人は途中で名前を改めてダヤン・ハーンという王の名前を名乗るんですが、この人は巨大な大元帝国をもう一度作りあげようという大きな願いを起こして、モンゴル復権を目指します。この人はチンギスの男系の血を引いています。チンギスの男系というのが伝統なんです。女系ではなくて、男系の子孫がモンゴルの皇帝になるという不文律があったんですけど、この人はチンギスの男系の血を引いているんですね。競争相手であったオイラト国、モンゴルより少し西の方にあるオイラトモンゴル国です

が、そことは同盟を結んで、広いモンゴルは再度統一されて、大きくなっていったんですね。ただその途中で、ダヤンハーンは一五一七年に死んでしまいます。これもよく分からない。死因は分からない。ダヤンハーンの孫に当たる人がいます。アルタンハンという王様なんですけど、これがモンゴル地域全土を掌握する偉大な王となりました。モンゴル世界全体の皇帝になったわけです。一五四二年頃にはモンゴル最高の実力者となっています。そのアルタンハンが強くなったのには色んな理由があるのですが、商売が上手だったんですね。商売はどういう風にしたのかというと、明の犯罪者となって明から逃れてきたようなアウトローたちをうまく使ったんです。彼らは明から来たわけで中国語が堪能ですから、モンゴルと中国との間で商売を、彼らを使ってやっただけなんです。フヘホトという土地がありますけど、ホトというのはモンゴル語でお城或いは都市という意味なんですけど、フヘというの漢字の帰化を発音したもんで、帰化人たちがここに住んだのでフヘホトと。そこですね、貿易を大々的にやるんですね。バハンナギというアルタンのお孫さんがいるんですが、残念な子どもで、なんかね、あんまり出来が良くなかった。話が残ってるんですけど、「自分の女性をおじいちゃんであるアルタンが横取りした」といって拗ねて敵方である明に逃げ込むんですね。変わった行動をとったんです。明も困ったでしょうね。敵方から王の孫がやってきた。困ってしまったって、明は賢い選択をします。「返します。このバハンナギをお返ししますから、その代わりに漢人投降者、つまり反政府活動者とか罪人とかが逃げていってますが、一掃してください、不浄分子を一掃してくださいと、そうすれば、アルタンハンに王に任じます」と、明の順義王としてアルタンを位置付けます。明はいろんなところに王を、周辺国に王を作って、それと連絡を取りながら経営をしていたんですけど、つまり、アルタンハンは明からも正式の立場を得たわけです。これですね、アルタンハンは立場が強大になっていきます。

財を得、そして政治的求心力も得たアルタンは、当時有名になっていたチベットのデプン僧院の僧院長であった

ソナムギャムツォ、この人がダライ三世になるんですが、ソナムギャムツォの評判に注目して「会いたい」という招書を送り、一五七八年に二人は青海で会見をします。アルタンの方はですね「元時代よもう一度」という夢を追っているわけです。「元時代よもう一度」というのは具体的には何かというと、皇帝クビライと宗教家パクパとの関係をイメージしてるんですね。古えより語り継がれる「転輪聖王と文殊菩薩の協力による理想的世界統治」がアルタンの夢だったんですね。だから、会いたい、ペアを組みましよう、私が王であなは大宗教家、これで世界はおさまりますと、こういうプロポーズをするわけです。ただ、これはですね、表面上はそう見えるんですけど、実際はチベットからのアプローチがあったそうです。これについて研究している先生もいて、お互いに近づきたかったというのが本当かもしれない。むしろチベット側から近づいたのではないかという風に、今は考えられます。チベット側には事情があった訳です。

チベット側の事情というのはどういったことなのかというと、それよりもちょっとだけ遡って、十五世紀半ば頃に中央チベット西部のツァン地方の支配者であったリンブン氏という豪族がいてるんですけど、その豪族がジワジワと攻め入って、ラサの方面に大軍を動かして、この一四九八年から一五二七年までの間、ラサの大招寺（チヨカン）というお寺のお祭り、モンラム祭というのがあるんですけど、これがデカイお祭り、デカイというのは利権が動くお祭りなんです。これをリンブンという豪族の力で無理やりカルマ派という宗派に祭りを主宰させましょうということになって、それまでやってたゲルク派を閉め出すわけです。ゲルク派は困ってしまっ、収入が途絶えてしまっ困ってしまっわけですね。タシルンポ寺というゲルク派の僧院があっ、管長にゲンドウニングヤムツォという人がおったのですが、この人は孤立無援で、周りにはカルマ派やリンブンで囲まれていて、タシ

ルンポ寺だけがゲルク派のサテライトのような形になっていたわけです。ところがゲンドウンギヤムツォという人は、すごい政治力を発揮するようになるんですね。

ゲンドウンギヤムツォはツアン地方の中でどんどん求心力を増していきます。期待を背負って今度はラサ北西にあるデプン寺に迎えられて、モンラム祭というそのお祭りもゲルク派の手にもどされることになります。順調にゲルク派の影響力が元に戻ってきた訳ですね。この調子でいくとゲルク派は昔のようにラサで繁盛するだろうと思います。その大事な時にゲンドウンギヤムツォが死んでしまいます。これが一五四二年なんですね。ゲルク派は困ったと思います。すごく政治センスのいいリーダーが突然亡くなったので、困ったんですね。ライバル側のカルマ派の親方はミキユードルジェという人で、当時三十五歳でバリバリなんですよ。

これをどうしようかということになった時にゲルク派はとんでもないことを考えたんですね。カルマ派の伝統であった転生制度をゲルク派が「いただきましょう」といって転生制度を活用するんです。というのは相手側のカルマ派の本拠地の中から赤ん坊を選んで、それがゲンドウンギヤムツォの生まれ変わりますよ、というふうに言うんですね。相手側の統制も乱れるでしょうしね。「生まれ変わります」と言われたら（転生者の）親族やらもバックアップをせざるを得ないから、スポンサーを引き抜いていく作業が行われていったわけですね。

ソナムギヤムツォは赤ん坊ですから、当初はバックアップする政治家たちが治めていたんですけれど、成長するとこのソナムギヤムツォもすごくセンスのいい活動をするんですね。そしてその相手側のカルマ派の有力者と融和策を推進します。西からラサに攻めていた軍隊も西の方に戻っていったわけですね。かつてのゲルク派が中央チベット、ラサ周辺を治めている状態が戻ってきた訳です。落ち着いてきたところで、何回かプロポーズを受けていた例のアルタンハーンからの「会いたい、会いたい」コールに、「行きましょう」というのでアルタンハーンの招待を受け

る訳です。一五七八年に現在の青海省までソナムギャムツォが直接行って、アルタンハーンと会見を行います。この時にアルタンハーンは「ご苦労さんです。あなたにドライラマという称号を与えましょう」というので、この時初めてドライラマという言い方、称号ができました。ドライとはモンゴル語で「海」のこと、これ以降ドライラマは皆「○○ギャムツォ」という名前なんです。現在はテンジンギャムツォですかね。第十四世はテンジンギャムツォですが、全員が「○○ギャムツォ」という名前ですよ。ギャムツォとは海なので、それで、その名跡をドライラマというんですね。なかなかドライラマは自分自身で「ドライラマ」と呼称することは少ないんですけど、私一点だけ「ダレラマ（ドライラマ）」とサインをしたものを持っています。脱線しました、話をもどします。

そしたらその人（ソナムギャムツォ）が「ドライラマ」の初代かというところ、そんな訳にはいかない。その人はずっとは生まれ変わりとして就任した訳だから、生まれ変わりが初代というのはおかしいから、先代を二代目のドライラマとして、さらにその前を初代にします。だからゲンドウントゥプという人が初代で、二代目が先ほどお話ししたゲンドウンギャムツォ、そして三代目が「ドライラマ」という名前をもらったソナムギャムツォということになります。ソナムギャムツォはその後、一五八二年にアルタンハーンの再度の招待を受けて、内モンゴルに行きます。例の帰化城（フヘホト）の所まで一五八六年に行っただけで、一五八八年に帰化城で客死をします。これも原因はわかりませんが、おそらく旅行中ですから伝染病か何かだと思います。当時はペストとか黒死病とかと言われる、なんだか分からないウイルス性の病気が多かったようです。それを患って急に亡くなるんですね。

ここでゲルク派はソナムギャムツォが亡くなった時に、良くない言い方かもしれませんが、かなり悪巧みを発揮します。というのは、その生まれ変わりをアルタンハーンの親族の中から選ぶんですね。第四世のドライラマを選

ぶのです。この意図は明らかで、アルタンハーンの力を自分たちの宗派に持つてこようとしたわけです。第四代ダライラマは名前をウンテンギャムツォといい、十五歳になるとチベットに行かなければならないのですが、この人は十四歳になるまでは、「いやや、いやや、いやや」と言い続け、剃髪もせずにモンゴルに居りました。その後ラサのチヨカン寺に行った時に、表白文を残していますが、これに興味深い文章が書いてあるんです。「再び輪廻において生を受けるのであれば、この国にだけは生まれたい」と書いてあるんです。これは「いやや、いやや」と言っていたことと符合するんですが、もちろん表向きの意味は「此土には生まれたい。彼土の極楽に生まれます」という意味です。おそらく本心は「チベットなんかいやや、田舎はいやや」と思っていたんだと思います。しかしダライラマになってしまったら、彼は平和のために奔走して非常に苦勞を重ねてこの人も早死です。二十八歳で亡くなります。そして今度、五世が選ばれるわけです。

チベット王というのは、ダライラマとは違うんです。ダライラマは宗教上のトップであって、王さんは別に居るんです。当時の王さんはカルマテンキョンワンポという人で、オイラト系の人ですが、彼は青海を牛耳っていたグシハンという武人がゲルグ派と結びついていることを面白く思っていなかった。カルマ派とグシハンは仲良くなかったんですね。このグシハンはチベット全土を手に入れようというわけで、一六四二年にチベット全土をこのグシハンが支配をする状況をつくりあげます。チベット全体を手に入れて、ダライラマにお供えするという形を取ったんです。ダライラマを上に乗くのではなくて、王として支配したそのチベット全体をお供えするという形をとったわけです。これがダライラマ政権の成立です。一六四二年だとされています。

清の方は「北京にダライラマに来てほしい」ということで、盛んに招待をして、一六五二年に北京にダライラマ五世は行っています。そして順治帝と会っております。その間、一六四五年から一六四八年にかけて、ポタラ宮殿

の大改装工事が行われるんです。ものすごい規模のリニューアル工事を行なったんです。先ほど写真を見せましたけど、あの写真のポタラ宮殿、今見ると堂々としたビルディングがあるみたいに見えますが、あれは山のへりにへばり付いているんです。前方向から見るとものすごいビルディングですけど、後ろから見ると山しか見えないぐらいのもので、そんなにバカでかいものではない、でかいですけど、現在のビルディングのようなものではないんです。地べたからあるわけではなくて、山にへばり付けて建ててあるんですね。古代からあった昔のポタラ宮殿は、非常にシヨボいものです。シヨボいと言ったら怒られそうですが、それほどものすごい建物ではなかったんです。そのイラストが残っています。これもカルヴァン派だったかの宣教師が、前の建物の時（ドライラマ五世よりずっと以前）、元時代に絵を描いているんです。これはバチカンに残っています。これを見ると、山があつて中腹くらいに少し建物があるだけなんです。それを今のような形にゲルク派は大改造します。そしてそこを中心にチベットとモンゴル全土の上に君臨する聖俗二権の府とする。こういうポタラ宮殿の大きな改造を行うんです。

そこからこのゲルク派は歴史認識を新たに創造します。新しく歴史を作ってしまうんです。それがどんな歴史かというと、「ドライラマ法王は観音の化身だ」というもので、それまでそんなことはあまり言わなかったんですが、「このチベットという国は観音菩薩が創り上げた土地なんだ」と、だから観音菩薩の生まれ変わり（化身）であるソツエンガンポという古代の王さまがこのチベットを作り、その観音の化身がずっと引き継がれて今のドライラマに続いている。だからチベットはドライラマのものであると、実に変な三段論法を作りあげたわけです。ポタラ宮殿のポタラとはポータラカと言うんで、観音の住まいなんです。それを象徴的にポータラカに見えるようなすごい建物に変えて、そして中にさまざまな絵画や塑像を作ります。今、スクリーンに映しているのはポタラ宮殿の中にある古代の王ソツエンガンポの像です。ターバンを巻いてるんですが、これは「十一面観音なんだけど、そ

の姿で人々の前に現れたら皆驚くだろうから、ターバンで頭を隠している。しかし隠しきれずに一番上から、チョコつと本仏のところが覗いている」。わざとあんな姿を作ったんですね。そうすると人々は、「ソントエンガンポ王という建国の王は実際は観音さんなんだ」と、「観音さんだったんだけど、それを隠して人間として生活したんだろう」ということになってくる。下の画像はソントエンガンポのところに中国から嫁いだ文成公主、ネパールから嫁いだブリクティです。中国やネパールと突然戦争にならないための政略結婚ですね。これは歴史的事実です。ところがゲルク派の歴史認識ではどうなっているかというと、観音の化身であるソントエンガンポには横にはターラー（多羅母）がいるはずだから、「白ターラーの文成公主とグリーンターラーのブリクティがいつも横にいるんだ」という考えで、ちょうど中国からの文成公主は色白でホワイトターラーのように見えただと思います。そういった歴史認識を創造し始めたんですね。そしてそれをドライラマ制度の上のせて、ドライラマはこのユーラシアの中で一番神聖な存在なんだと言いつ出したわけです。

このスクリーンに映っているサンギェギャムツォの絵（画像）は残存しているのですが、これはお坊さんのような格好をしています。全く政治家ですから、本当にこのような格好をしていたのかどうかはよくわかりません。サンギェギャムツォは非常に頭のいい人でした。今でも彼が書いた書物は、我々現代のチベット学者が解読しきれないぐらいの沢山の著述を残していて、天文暦学医学等未だに未解読の書物が沢山あります。サンギェギャムツォの書いたものの中に、ハレー彗星の観測記録のようなものがあって、東京天文台の先生がそれを検証すると、確かにその日にハレー彗星が飛んでるはずだという計算をしたくらい正確です。天文に非常に才能があったサンギェギャムツォ、他にも様々な学問において天才だったと思います。また彼は文化的な政策でさまざまな画策をしています。周辺国の王族（王家の次男、三男）を「どこどこのお寺の和尚さんの転生だ」と認定したんです。そうすると

周辺諸国は味方となり、スポンサーにもなり、戦争の時にはゲルク派に加担するわけです。これは中国がしてきた朝貢制度の宗教版と言えますかね。どうしても逆らえないような構造を、転生制度を使ってサンギェギャムツォはやり始めたわけです。これはドライラマとしては五世の頃です。ところがこの五世は急に死んでいるんですね。それは一六八二年のことで、ポタラ宮殿の改装も終わり間近であり、転生制度によるサテライトづくりも完成が近いという「構想していた歴史認識」がもう少しで完成形という所で、摂政であったサンギェギャムツォとしては、五世にはもう少し生きていて欲しかった。そこでドライラマ五世が亡くなった事実を変え、五世の影武者を立てます。時には御簾の奥の方にいる五世（影武者）に伝え、ドライラマ五世の言葉として自身の思い通りに答えていたそうです。一人芝居です。このように五世の死をひた隠しにした。その期限はドライラマ六世が沙弥戒を受けるまでで、約一四年くらいの猶予があった。そしてサンギェギャムツォとしては六世を思い通りに動かそうというもくろみで、「尊敬を受ける存在として黙ってじっと座っておいてくれたらいい」と思っていたのに、最初の話ですが、六世は「私はお坊さんにはなりません」と言い、髪を伸ばして、何人もの女性と交際し、それらは隠れてではなく詩に歌って発表した。そして六世はラザンハンに狙われることとなる。

サンギェギャムツォはその後、形式的に息子に摂政を譲り、院政を試みます。ラザンハンと諍いがあった時もサンギェギャムツォは摂政の息子を動かして、ラザンハンに青海に戻るように言っています。ラザンハンはそれに応じて青海に戻ると見せ掛け、途中で踵を返してラサに行き、サンギェギャムツォを殺してしまいます。ここでサンギェギャムツォの企みは全て終わるわけです。

この後、問題はドライラマ七世です。ドライラマ七世を決めないといけないが、チベットの大衆は（六世の）詩にリタンという地名が出てくるので、「次のドライラマはリタンで生まれるんだ」と信じていた。はじめ清は六世

を偽物だったと言って、新しい六世を選んでいたので、七世をリタンで生まれた子供にするわけにいかなかったんです。ところが大衆は言うことを聞かず、どうしようもなくなって、清朝としても最終的にはリタンの少年を「やはり七世なんかなあ」という風に意見を変えて、一転してリタンの少年を七世に選んで、そして清は「ラサに進駐すべきだ」という考えを起こしたんです。ところが他国ですから理由もなく軍隊で攻め入るわけにいかない。そこで青海にいた軍人を北京に呼び寄せて接待をするわけです。そして青海にいる軍人たちを焚き付けて、七世の少年を錦の御旗にして、これを護衛するという形でラサに攻めて行こうとし、清軍はそれをサポートする形をとった。それまで清軍はラサに進駐したことは無かったんですが、このような事情を作って七世を担ぎ上げてラサに入城するということが起こります。結果、チベットに七世を中心とした新しい政権ができます。これは完全に清の傀儡、清の思い通りに動くダライラマ制度ができたわけです。その後、十三世に至るまで続くんですが、十三世の頃から段々と中国に反発する動きが出てきます。そこから話をするともたいろいろ問題が起こりますので、ここまです話をやめたいと思います。

以上のような背景があつてダライラマ六世は恋愛の詩など、自らの放蕩を「わざと」見せることによって、ダライラマという存在を宗教に取り戻すということをしたんです。政治のためのダライラマじゃなくて宗教の中のダライラマというものの、ゲルク派というものを作りたいかった。私はいつものこのダライラマ六世の放蕩とされる恋のスクヤンダルは、一休の活動とよく似ているなと思います。風狂とされた一休も同じような活動をしています。権威にある者が権威を壊すということは時々、仏教世界では起こり得ることだと思います。

ダライラマ七世はリタンというところで生まれますが、リタンで生まれるということ詠ったのが、53番目にあります。これは非常に有名で、これがダライラマ六世の辞世の詩とされています。今日の最後にこの辞世の詩を歌

